

第2回 かながわ気候市民会議 in 逗子・葉山 会議録

■ 日時・場所

日時: 2023年8月5日(土)13:00~17:00

場所: 葉山町 保育園・教育総合センター 2階 会議室1・2、研修室

■ 出席者

参加者: 36名(欠席9名)(1~7の7グループを編成)

運営者: 神奈川県環境農政局脱炭素戦略本部室長 柏木剛氏

葉山町 町長 山梨崇仁氏

一般社団法人環境政策対話研究所 柳下正治

専門家: 渡部厚志(地球環境戦略研究機関)

司会(全体ファシリテーター): 村上千里

■ 当日資料

当日進行用資料「かながわ気候市民会議 in 逗子・葉山(第2回)」(投影のみ)

レクチャー資料「私たちの暮らしと温室効果ガス」

1. カーボンフットプリントについて
2. カーボンフットプリントの少ない暮らしとは

参考資料1 「オプション・カタログ20230528_相模原57種版」

参考資料2 「逗子・葉山用_脱炭素ライフスタイルチャレンジの手順_rev1」

参考資料3 「脱炭素ライフスタイルチャレンジ」準備メモ」

■ 市民会議の概要

1. 開会挨拶・ウォーミングアップ

かながわ気候市民会議の主催者である、神奈川県環境農政局脱炭素戦略本部室長の柏木剛氏および第2回会議の開催地であり運営協力者でもある葉山町の町長山梨崇仁氏より開会挨拶があった。続いて一般社団法人環境政策対話研究所(IDEP)の代表理事の柳下正治氏より運営体制についての説明が行われ、すなわち、本市民会議は、神奈川県2023年度の新事業「若年者・地域向け脱炭素普及啓発業務」の一環として行われ、その企画・運営については、IDEP及び公益財団法人地球環境戦略研究機関(IGES)が受託実施していることについて説明がなされた。

その後、全体ファシリテーターより第1回市民会議のアンケート結果の共有によるふり返りと、第2回会議の目標「脱炭素と暮らしのかかわりがわかり、脱炭素ライフスタイルにチャレンジしてみよう!」とされていることが説明された。その後、グループで自己紹介が行われ、参加者間で第1回の感想等を共有した。

2. 専門家レクチャー1「私たちの暮らしと温室効果ガス」

IGESの渡部篤志氏より「私たちの暮らしと温室効果ガス」についてレクチャーが行われた。気候変動と脱炭素化を大きな視点で学んだ第1回に対し、第2回では日常生活との関連で脱炭素を考えるため「カーボンフットプリント」という考え方が紹介された。

カーボンフットプリントとは、私たちが使う製品やサービスの原材料を作る時、工場などで加工する時、できた製品を輸送する時、私たちが使う時、そして使った後の廃棄やリサイクルなどの各段階で発生する温室効果ガスを総合的に捉えて計算するものである。この方法を使えば、私たちの日常の行動(例:通勤・通学・買い物などの移動、家での冷暖房や調理、食事、消費財やサービスの購入、レジャー活動)に関連して生まれる温室効果ガスの量を計算できる。日本国内でも地域の気象や社会経済の条件によりカーボンフットプリントは大きく異なるが、日本に暮らす人の平均的な消費では、年間一人7,120kgのCO₂に相当する温室効果ガスが排出されており、これを小さくする必要がある。

この会議の参加者に事前に行った「カーボンフットプリント診断アンケート」への回答者のカーボンフットプリントは平均で6,866kg/年で、全国平均よりも少なめで、住まいや食の分野の温室効果ガスが少なく、移動に関連する温室効果ガスが多いことが説明された。

3. グループワーク1・専門家との質疑応答

グループワーク1では、レクチャー1に対する感想や疑問をグループ内で共有した。グループワークを経て取りまとめられた質問と意見は休憩中に提出してもらい、休憩後に全体で共有した。

質問に対する渡部氏の回答の概要は以下のとおりである。

質問1:カーボンフットプリント(CFP)の計算方法について、カーボンフットプリント計算に必要となるサプライチェーンにおけるデータをどのように収集しているのか。またその精度は。カーボンフットプリントの6領域の算出の根拠は。

回答1:大変複雑な積み上げ計算である。製品ごとに計算しており、元々は経済産業省が作った数字がある。例えばハムの場合、まず豚を育てるときに豚舎をどんなエネルギーを使ってどのくらい暖房しているか、どんな餌を与えているかなど、そこから〇〇国なら豚肉になるまでにこのくらいのCO₂が排出されるとわかる。同様に加工工場ではこのくらいの電気を使っている等々を算出し、それらを1つ1つ積み上げていく。

一方、どの分野の素材の産業からどのくらいが加工産業に行き、加工の結果どのくらい製品になるのか、捨てられるのはどのくらいかをまとめた産業関連表というデータベースに基づいて、産業全体で加工に回る数値を概算する。日本の一般的な消費者の消費生活にかかわる多くの製品やサービスのCFPについて計算をした国立環境研究所のデータベースがあり、我々はそれらの研究者と協力し、地域別の消費統計に基づいて、横浜市や相模原市などの消費傾向などを掛け合わせて、●●市の一人当たりのCFPを計算している。かなりの過程を積み上げて計算しているため、個別具体的な計算と比べると精度は落ちるが、最終的に誰の消費のためにどれだけCO₂が出ているのかという別の角度から確認するという考え方として広がりつつある。技術革新を反映させるために見直しは行われ

るが、これだけの過程の積み上げなので、毎年のようににはできずどうしても遅れが出る。
(電気の原単位について今のベースが2016年であるのと同様である)。この方法で計算
すると、どの国でもカーボンフットプリントの大きな領域は「住居、移動、食」等の6領域にな
る。

質問2:リサイクルで出るCO₂の量はどのくらい深刻か。

回答2:ひと言で回答するのは難しいが、リサイクルしないよりはした方がよい。しかしリサイクルとい
っても燃やす原料としていることも多い。燃やすよりは素材に戻すリサイクル、さらにリサイ
クルしないでもう一度使える方法があるならその方(リユース)がよいというのが我々の考
え。

質問3:発電に使うCFPIについて、説明資料P16のエネルギー源別の図の縦軸の単位「1キロワッ
トアワーあたりのライフサイクルCO₂排出量」とあるが、同じ発電量あたり、というのはどうい
うことか。そもそも発電量が違うし、各エネルギー源によって発電設備のライフサイクルは
異なるがどうやって計算しているのか。

回答3:プラント(設備)の規模も計算に考慮されている。そのプラントの規模や寿命で分割して1
キロワットアワーあたりを算出している。

質問4:フットプリント数値化をもっとわかりやすく知ることができないのか？

回答4:CFPIは新しい考え方ではなく、経産省は20年以上前から推進してきた。15年ほど前は一
般の製品のCFP表示もあったが、今は低迷している。企業側の理由は「がんばって計算し
表示しても消費者が選んでくれない」からと言われている。最近では企業の調達に関連し
て、ビジネス向けの商品にはCFPが注目されている。そのうち消費者向けにも表示が復活
するかもしれない。

質問5:CFP診断書の評価基準は何か。赤から緑にするには。アドバイザーはいるのか。

回答5:配布したCFP診断書は、皆さんのアンケート回答に基づくもの。かなりざっくりとした計算に
なっている。本当に精度を上げた計算をしようとすると300問必要になる。赤から緑へ
は、後半に皆さんのCFPを減らす方法を紹介する中で、これだったらやってみたい、でき
るかもしれないというのを選んでいただきたい。

質問6:CFPIは大事な指標だが、本当に温暖化を解決する鍵になるのか。個人が消費を抑えると
本当に脱炭素になるのか。CFPを定義化すると経済的にマイナスになるのでは。

回答6:個人の消費を抑えることで、脱炭素になる場合とならない場合がある。例えば今日ここに
自動車で来るのをやめてバスできたとすれば、運転するはずだった分減っている。

しかし自分が飛行機での旅行をやめても、飛行機は空席のまま飛んでいけば、CO₂が
減るわけではない。乗る人が少ないから減便しようと航空会社が気づいてくれたら減っ
ていく。すぐに減る場合と、時間がかかる場合がある。しかし世界の排出量と整合的なはず

なので長い目でみればCFPが減っていけばCO₂削減にはなる。地域によっては経済へのマイナス影響は確かにある。でも人々が旅行の代わりに地元で観光すれば地元はもしかしたらプラスになるかもしれない。CFPを減らすことを全部やろうということを強制するのではなく、地域全体として捉えて地域の皆さんの感覚で話し合ってもらいたい。

質問7: CFPから派生した質問だが、国をまたいでCO₂がある中で、世界が同じ基準で動き出しているのか。

回答7: 排出削減については世界は合意している。CFPについては、日本のように食べ物の半分以上を輸入に依存している場合は、日本国内だけではなく、輸入先の国々に頑張ってもらう必要があるため長らく取り組みに消極的だった。しかし最近スウェーデンやイギリスでは、CFPを減らす取り組みは外国への支援になるためその方向で考えよう、と言い始めた。これを機に、国際的にCFPを同じ方法で計算できるようにしようという議論が始まったところである。

4. 専門家レクチャー2「カーボンフットプリントを減らす行動」

レクチャー1に引き続き、渡部氏から家庭のくらしのなかでカーボンフットプリントを削減することのできる脱炭素行動が紹介された。(詳しくは、資料「脱炭素ライフスタイルオプション・カタログ」を参照)

5. グループワーク2・発表

グループワーク2では、上記4の話題提供で紹介された脱炭素行動や、資料「オプション・カタログ」にある行動の中で、「魅力的、くらしに取り入れて見たい脱炭素行動」と「魅力的でない、取り入れたくない脱炭素行動」を考え、グループで共有した。参加者の皆さんからたくさんの意見が出た。以下は主な例。

- オンラインの帰省は難しいという意見で概ね一致。「会う」それによる「交流」や「親とのふれあいや状況確認」という、オンラインでは達成されない目的があるという意見。
- 「衣服を大切に長く使う」という行動をぜひやってみたいという方と、「衣服を選ぶのは大事な趣味だからできない」という方
- 「肉類の消費を減らす」行動をやってみても良いという方と、肉を食べたいので難しいという方。食についてはタンパク質確保など健康面の議論もあった。また脱炭素的によいという前に、おいしいのが基本だよ、それが地元のもので安くて自分にもメリットがあることが大事という意見。
- そもそも消費について、本当に必要なものを買うというより、なんとなく買っている/買わされているものが多いのではという議論
- レジャーについての規制は勘弁。海外行かせてよ、という意見。
- 「自動車の利用を減らす」行動を取り入れたいという方と、バスなどでは自分の好きな時間に移動できないのでやりたくないという方。また、車は移動手段だけではなく、趣味として心の充足を満たす部分でもあり、手放すのは難しいという意見。

- 一方でカーシェアリングは地域で見かけるようになってきたし、行政の補助などが必要だが、密着度を増やすことでチャレンジできそうだし、地域に対する啓発にもなるのではという意見もあった。
- ライドシェアは意外と効果が高いし、行政などの支援で地域アプリを開発したらもっと促進できるのではという提案。
- 住居について初期投資が大きいと取り組みにくいという意見。一方でよいことも理解している中、エコとコストの面でどう考えるか、普段の欲望と天秤にかけるのが難しいという議論も。
- 電子書籍は扱いにくいという意見が複数ある中、読みやすいものと紙で手に取りたいもの(図鑑など)との使い分けの提案、また図書館の活用促進(涼しいクールシェアにもなる、近くの図書館にないなら国会図書館などを利用しやすいサービスを)などの意見も出た。
- 今後の2週間のチャレンジをイメージしたとき、100か0かではなく、100だったものを70にするとか目標にすればよいのではという提案。

これらに対して、渡部氏からは、具体的な提案や消費についての本質的な指摘などが短時間で出てきたことに対する賞賛が述べられた。また、脱炭素したけど心が貧しい…とならないように今後の2週間の挑戦をしてみしてほしいとコメントがあった。

6. 脱炭素ライフスタイルチャレンジの説明

8/12～9/3までの間の任意の2週間に、脱炭素行動のいくつかに挑戦していただく「脱炭素ライフスタイルチャレンジ」へのご協力をお願いした。「脱炭素ライフスタイルチャレンジの手順」を参照し、5分野から一つずつ、また、やや難しいかもしれない行動も選んでいただくようお願いした。今の時点でやってみようとする行動を「準備メモ」に書き、グループの中で共有していただいた。

たとえば「公共交通機関で移動する」や「ヴィーガン(完全菜食)」に挑戦するという方もいらした。

7. 次回に向けての連絡

村上千里全体ファシリテーターより次回のスケジュールに対する説明を行ったほか、9月1日、15日に開催の「かながわ脱炭素次世代ワークショップ」のお知らせと参加者募集に言及し、更に主催者サイドから、今回は非常の酷暑の中9名の欠席者が出たが、主催運営サイドとしてフォローアップしていく旨説明がなされた。その後、事後アンケートを実施した。

8. 閉会

以上